

# 大学生は初修外国語のどのような点に難しさを感じるのか

— 「対照言語学1」履修者のレポートより —

田村 建一 (日本語教育講座)

## What kind of difficulties do Japanese university students meet in their study of foreign languages except English ?

Kenichi TAMURA (Department of Japanese as a Foreign Language)

### Summary

The present author asked the students of his 'contrastive linguistics' class in 2006 and 2007 to write which foreign languages except English they had studied or were studying and what kind of difficulties they had met then. The languages studied by them were Chinese, German, French, Korean, Portuguese, Spanish, and Modern Greek. Almost all the students had learned two of these languages at least. The students regarded the following components of each language as difficult to learn; 1. the features which differ from both Japanese and English, e.g. the opposition of aspirated and non-aspirated plosives in Chinese or Korean, the pronunciation of *r* [ʀ] in French or German, and the phonetic value of the letter *j* ([x] in Spanish, [j] in German, and [ʒ] in French) etc., 2. the words which show strong formal resemblances to English equivalents, but are pronounced differently, e.g. *Name* in German or *menu* in French etc. In the classes of the above-mentioned languages the teachers should properly point out the differences from and the resemblances to English to their students. The present author thinks that just these aspects would arouse the students' interest and motivate them in their study of languages.

**Keywords** : 初修外国語, 外国語学習, 言語転移

### 1. はじめに

筆者は愛知教育大学(以下、本学)日本語教育コース(入試定員20名)の2年生を対象とする専門科目(必修)「対照言語学1」を担当している。この科目の主たる授業目標は、外国語学習にさいして発生する母語の構造の目標言語に対する影響(=言語転移)について考察することであるが、さまざまな種類の具体的な事例をとおして、学生が日本語や英語以外の言語の構造の特徴にも注目するよう努めている。

2006年度と2007年度のこの授業において、学生がそれまで学習した、あるいは学習中の英語以外の外国語に関し、どのような点に学習上の困難を感じたのか、レポートにまとめることを課した。本稿は、この二つの年度の学生のレポートから得られた知見を報告するものである。

### 2. レポート提出者の外国語学習

はじめにレポートを提出した学生の外国語学習の状況について報告する。

本学の共通科目としての外国語科目の履修の仕方は以下のようである。まず、英語以外の外国語としてドイツ語、フランス語、中国語の三つの中から一つを必ず履修しなければならない(これらの外国語を以下、

独仏中と略記する)。本稿におけるレポート提出者に関してもそうであったが、大学全体で毎学年およそ3分の2の学生が中国語を履修するようである。

学生は、英語と独仏中の履修単位に関して次の二つのうちのどちらかを選ぶことができる。

- 英語4単位+独仏中2単位
- 英語2単位+独仏中4単位

本学の外国語科目は週1回ずつ15回の授業で1単位であり、4単位履修する外国語は、1・2年生の2年間にわたり週1回ずつ授業が行われる。2単位履修する外国語は1年生の間だけ週1回ずつの授業が行われる。またこれとは別に、本学では必修科目としての「英語コミュニケーション」が1年生後期と2年生前期に週1回ずつ行われる。

自由選択の外国語科目としては、朝鮮語(本学ではこの名称を用いている)とポルトガル語が開設されており、前期と後期それぞれ1単位ずつ(すなわち週1回ずつ)の合計2単位まで履修することができる。この二つの言語の授業は、2年生以上の学年に開かれているが、同じ時間帯(月曜日の3時限目)に行われるため、同時に履修することはできない。

レポートでは英語以外の外国語の学習状況についても記述してもらったが、その結果を年度別にまとめると以下のようなものである。なお、たまたま両クラスとも留学生は受講していなかった。

### 2.1. 平成18 (2006) 年度

2006年度のレポート提出者19名は、英語以外に以下の外国語を学習したか、あるいは学習中であった(学習者の多い順に記す)。

- スペイン語 18名
- 中国語 13名
- 現代ギリシャ語 5名
- フランス語 4名
- 朝鮮語 4名
- ポルトガル語 3名
- ドイツ語 2名

スペイン語学習者が18名いるのは、日本語教育コース1年生を対象とする専門科目(選択)「外国語演習2」で前年度に非常勤講師によるスペイン語の授業が行われたためであり、当該学年のほぼ全員がこの授業に参加したことを意味する。

現代ギリシャ語の学習者がいるのは、1年生を対象とする共通科目の人文科学入門(選択必修で、学生は指定された時間帯に開講される六つの授業の中から一つを選ぶ)でたまたま前年度に美術史を専門とする教員によってこの言語への入門が行われたためである。

### 2.2. 平成19 (2007) 年度

2007年度のレポート提出者24名(このうち1名は3年生で、さらに2名が日本語教育コース以外の学生であった)は、英語以外に以下の外国語を学習したか、あるいは学習中であった(学習者の多い順に記す)。

- スペイン語 20名
- 中国語 13名
- ポルトガル語 12名
- 朝鮮語 6名
- ドイツ語 5名(+授業外での学習1名)
- フランス語 4名(+授業外での学習1名)
- 独仏中の履修に関し不明 2名

スペイン語学習者が20名もいるのは、2006年度の場合と同様、前年度の「外国語演習2」においてスペイン語の授業が行われたためである。

ポルトガル語と朝鮮語に関しては、上述のように2年生から履修が可能で、また同時に両方を履修することはできないので、この二つの科目の履修者が合わせて18名もいるということは、当該学年の日本語教育

コースの学生21名のほとんどが自由選択の外国語科目に挑戦していることを示す。

たまたまこの学年には顕著な形で現れたが、じっさいにこれまでの学生との対話や簡単なアンケート調査をとおして、本学日本語教育コースの学生の外国語学習に対する意欲は、本学全体あるいは日本の大学生全体の平均よりもはるかに高いと筆者は実感している。それゆえ、本稿が資料として用いる学生のレポートは、量的には不十分であるかもしれないが、記述内容の質は有効であると考えたい。

## 3. 各外国語において難しいとみなされる項目

レポートの課題は両年度で若干異なる。2006年度は英語以外の一つ以上の外国語について「学習する上で難しいと感じた点」を音声・音韻の領域に限定して書くよう要求した。これに対し、2007年度は同じことを音声・音韻と文法の二つの領域に分けて書くよう要求した。

以下、言語ごとに学生の記述した内容(学習する上で難しいと感じた点)を整理し、箇条書きの形でまとめる。ある項目を何人の学生が挙げたかという点に関し、「複数」は二人、「多数」は三人以上を意味し、それ以外のものは一人の学生が挙げたことを意味する。筆者による補足・注解には※を付ける。

レポートで扱われた言語は、学生により一言語の場合もあれば、二言語以上の場合もある。したがって、言語によっては2~3人の学生の記述しか得られなかったものもある。

また、両年度ともレポートは前期第3週目の授業(4月下旬)に課したため、ポルトガル語と朝鮮語に関しては、学生が学習を開始してまもない段階での記述であることに留意しなければならない。

### 3.1. 中国語

以下の中国語に関する記述において、ローマ字はピンイン表記を示す。また、漢字は日本語式に表記する。

#### (1) 音声・音韻(両年度)

- 有気音と無気音の区別。※後述の朝鮮語の激音と共通。
  - 声調に関するもの。特に第3声連続した場合の変調や、「一」や「不」などの語における音環境による変調。
  - 音節末の-nと-ngの区別。
  - 反舌音zh, ch, sh, rの発音。
- ※以上の4項目は、複数の学生が指摘した。
- shiとxiなど、同じ日本語の音(この場合「シ」)に類似する音節の区別。
  - yuの発音。※これは母音[y]を示すが、この母音

についてはドイツ語やフランス語でも指摘されている。筆者にはむしろ、[y] を子音との結びつきによってピンインでuと表記したりüと表記したりする仕組みのほうが厄介に感じられるが、この点は誰も指摘しなかった。

(2) 文法 (2007年度のみ)

• 英語とも日本語とも異なる語順。例えば、「我每天在家吃早饭」(私は毎日家で朝ごはんを食べる)のように時間や場所を表す副詞句(下線部)が動詞句よりも前に置かれる点。

• 中国語「的」と日本語「の」の非対応。例えば、「大阪是日本経済中心」(大阪は日本経済の中心である)のように、日本語では「の」が必要な場合の「的」の不使用など。

※以上の二つの項目は、複数の学生が指摘した。

• 「那本書」(あの本)のように指示詞と名詞の間に類別詞(下線部)が挿入されること。

• 英語のbe動詞に相当する「是」が、「冬天冷」(冬は寒い)のような形容詞述語の文には用いられないこと。

• 日本語の「少し」に当たる表現が何種類もあり、時間、動作、物の分量で別の表現が用いられること。

### 3.2. ドイツ語

(1) 音声・音韻 (両年度)

• r (口蓋垂ふるえ音) の発音。※複数の学生が指摘。

• 英語とは異なる音を表す文字 (j, v, w, z) やローマ字式ではない綴り (ei, ie, euなど) を覚えること。

• ウムラウト (üやöなど) の発音。

• ローマ字式の綴りなのに、Name (名前) のように英語と類似した綴りの語を英語式に発音してしまうこと。

(2) 文法 (2007年度のみ)

• 冠詞や形容詞の格変化。

• 名詞における性の区別。「ズボンが女性名詞で、スカートが男性名詞というように先入観が裏切られる。」

※以上の二つの項目は、複数の学生が指摘した。

• Apfel / Äpfel (「りんご」の単数形と複数形) のように、ウムラウトによる複数形の形成。

• 動詞や助動詞の人称変化。

• 助動詞を用いるとき文の構造 (※動詞の不定詞が文末におかれる)。

• 非分離動詞の過去分詞のみgeが付かないこと。

• 現在完了の助動詞にhabenとseinの二種類があること。

• 二人称代名詞に敬称と親称の区別があること。

### 3.3. フランス語

(1) 音声・音韻 (両年度)

• r (口蓋垂ふるえ音) の発音。※多数の学生が指摘。

• [y] や [œ] などたくさんある母音の発音と区別。

• menuなどローマ字どおりでない綴りの読み方 (※他にai, au, eauなどを指すと思われる)。

• リエゾンとエリジョン。

※以上の4項目は、複数の学生が指摘した。

• 単語の綴りが英語と似ていて混同しやすいこと。

(2) 文法 (2007年度のみ)

• 動詞の活用の複雑さ。※多数の学生が指摘。

• 性と数による冠詞の区別。※複数の学生が指摘。

• 形容詞とそれが修飾する名詞の語順 (※多くの形容詞は名詞の後に置かれる)。

### 3.4. 朝鮮語

(1) 音声・音韻 (両年度)

• 母音の多さ。[e] と [ɛ], [o] と [ɔ] などの区別。※多数の学生が指摘。

• 激音 (有気音) の発音。※これに対し、濃音を指摘した学生はいなかった。

• 語末の子音 [-n], [-m], [-ŋ] の区別, および [-t], [-p], [-k] の区別。

(2) 文法 (2007年度のみ)

• 語幹が母音終わるか子音終わるかによって動詞の活用語尾がことなること。

• 数詞に漢語系と固有語系があり、使い分けが面倒なこと。

### 3.5. ポルトガル語

(1) 音声・音韻 (両年度)

• r の発音。特にrが語の中の位置によって別の発音になること。※多数の学生が指摘。

• sとzの読み方に二種類あること。※複数の学生が指摘。

• 無音のhをつい発音してしまう。

• 英語とは異なるti [ʃ] やdi [ɸ] などの読み方。

(2) 文法 (2007年度のみ)

• 性と数による冠詞や形容詞の語尾変化。※複数の学生が指摘。

### 3.6. スペイン語

(1) 音声・音韻 (両年度)

• 語頭のr-や語中の-rr-における巻き舌の発音。

• jやge, giにおける [x] の発音。

※以上の2項目は、多数の学生が指摘。

- 無音のhの存在。
- 母音uを日本語のように（※つまり [u] として）発音してしまう。

(2) 文法（2007年度のみ）

- 名詞に性別があり、それに合わせて冠詞や形容詞が変化すること。※多数の学生が指摘。
- 動詞の人称変化。不規則動詞がたくさんあること。※複数の学生が指摘。

### 3.7. 現代ギリシャ語（2006年度のみ）

(1) 音声・音韻

- 喉の奥で発音するハ行。※ [x]のことと思われる。※2006年度は音声・音韻の領域についてのみ問うたが、次の文法事項を挙げた学生もいた。
- 名詞における性の区別。

## 4. まとめ

以上のレポートの記述内容に示されているように、学生が外国語を学習する上で難しさを感じる項目は、各言語の特徴に応じてまちまちであるが、共通するものも見られる。

それはまず、当然のことながら、母語である日本語にも既習外国語である英語にも存在しない特徴であり、例えば中国語や朝鮮語における有気音・無気音の対立や、ドイツ語やフランス語における口蓋垂ふるえ音rの発音、あるいはドイツ語のj [j] やスペイン語のj [x] のように英語とは異なる音を表す文字であったりする。また一方では、フランス語、スペイン語、ドイツ語に関して、英語と綴りの上では類似するものの発音が異なる語（例えばフランス語のmenuやドイツ語のNameなど）が英語との混同を引き起こすことが指摘されている。

日本ではすでに初等教育から高等教育に至るまで英語学習が継続されるという現実が存在する以上、大学の初修外国語教育においては、教師がさまざまな段階で各言語の英語との相違と共通性について整理し提示することが重要であろう。また、この点こそが学生に知的な刺激を与え、学習動機を高めるきっかけになるのではないかと筆者は考える。

特にドイツ語Nameと英語nameの対比は、英語の歴史において起こった音韻変化に言及し、英語の発音が綴りと一致しない理由を学生に説明するまたとない機会である。英語教師に限らず、日本の語学教師には英語史の基礎知識が必要であると筆者は考える。

また、言語間の類似性と関連して、定冠詞leを例に挙げて「スペイン語とフランス語が似ているため混乱した」と指摘した学生もいた。上述のようにレポート提出者のほぼ全員が英語以外の外国語を二つ以上学習

していた。系統的に近い言語間には、今の例とは逆に正の転移（プラスの影響）もあるはずであり、例えばフランス語文法の初級修了程度の知識は、スペイン語やポルトガル語の文法の習得を促進するであろう。今回はまだこの点に関する学生の認識について調べるには至らなかったが、非常に興味深いテーマである。

筆者は、担当する本学日本語教育コースの学生にできるだけ多くの外国語を学ぶよう勧めているが、彼女たち／彼らのじっさいの学び方としては、独仏中の一つ+α（+α）のケースが多いようである。本学では選択必修科目である独仏中に関しては自由選択の枠組みが考慮されていないので、例えばドイツ語を選択した学生は、（本人の意志しだいであるが）時間割や人数制限の関係でフランス語や中国語を履修することが難しいことになる。

「外国語としての日本語」の教育を専攻する学生にとっては、自らがさまざまな外国語を学ぶ体験をもつことが重要であることはもちろんである。しかしこれには限界があるので、そうした体験とならんで重要なものが、周りの学生たちから自分が学んでいない言語についての情報を得ること、すなわち、その言語にはどんな特徴があって、どんな点が学習する上で難しいかという知識を得ることである。身近な者からの体験に基づく情報は、書かれたものから得られる情報よりも内在化されやすいであろう。本稿が用いた学生のレポートは、そうした体験の共有を授業の中で行うために課したものである。